

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

蜷川実花 写真家／映画監督

Mika Ninagawa / Photographer / Film Director



CREATOR^{No} INTERVIEW 85

蜷川実花 Mika Ninagawa

東京都生まれ。01年、第26回木村伊兵衛写真賞を受賞。07年、初監督を務めた映画『さくらん』は、第57回ベルリン国際映画祭、第31回香港国際映画祭に特別招待作品として正式出品。08年に個展「蜷川実花展」が全国の美術館を巡回し、のべ18万人を動員。10年、Rizzoli N.Y.から写真集「MIKA NINAGAWA」を出版、世界各国で話題となる。12年、監督第2作目となる『ヘルタースケルター』が公開し、22億円の興行収入を記録。新藤兼人賞銀賞を受賞した。16年、台湾の現代美術館（MOCA Taipei）にて大規模な個展を開催。20年東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会理事就任。

蜷川実花公式HP <http://www.ninamika.com>



クリエイターインタビュー

『もっと熱狂したっていい。』

『アートでリーダーシップを取るためにアジアから学べること』

アジアには、おもしろいことができそうな予感が常にある。

photo_mariko tagashira / text_ikuko hyodo

ひと目見てそれとわかる独特の世界観で、写真のみならず映像やアート作品も数多く手がけている蜷川実花さん。メインプログラム・アーティストとして参加した『六本木アートナイト 2017』のキーワードのひとつが「東南アジア」でしたが、偶然にも最近ではアジアでの活動が増えているといいます。2017年11月には上海で大規模な個展が控えている蜷川さんに、アジアにおける六本木の未来についてお聞きしました。

作り手と受け手の境界線が曖昧な時代のアートのあり方。

最近、アート業界ではない方とお話していたら、「蜷川さんって写真も撮られるんですか？」とか「ベースは写真なんですわね」と言われることが立て続けにあったんです。たしかに映画も撮っているし、写真以外の活動も増えてはきているけど、自分の肩書きが写真家であることは絶対だと思っていたので、人によってそうは見えていないというのが新鮮で。

よくよく考えたら、『六本木アートナイト 2017』の作品も、写真を使ったのは飾りつけた風車くらいで、写真がメインではない。作品のなかで写真を撮ることで、私の世界観を体感してもらえるようなインスタレーションなので、結果的にその指摘がよく現れた展示になったなあと思っています。

今は、写真を撮ることも撮られることもカジュアルになっていて、発表するという行為が良くも悪くも軽やかじゃないですか。AyaBambi (アヤバンビ) ちゃんみたいに SNS をきっかけにあっという間にスターになって、マドンナのライブで踊っちゃうようなことも現実に起きていて、境界線がどんどん曖昧になっていると思います。可能性が無限に広がっていることに興味があって、最近はそのようなことを写真や映像作品のテーマにしたいと思っているのだけど、六本木アートナイトの作品も言ってみればその一環。たった 2日間だけ夢のような空間として現れる不思議な感じもいいなと思っています。



六本木アートナイト 2017

2017年9月30日～10月1日に、六本木の街を舞台に開催された一夜限りのアートの饗宴。今年は『未来ノマツリ』をテーマに、アジアを中心に世界中からアート、デザイン、音楽、映像、パフォーマンス作品が集結。メインプログラム・アーティストの蜷川さんは、六本木ヒルズ、東京ミッドタウン、国立新美術館にてインスタレーション作品を発表した。

AyaBambi(アヤバンビ)

Aya Sato と Bambi Naka のダンスユニット。ダンスワークショップの映像が SNS で話題となり、国内外のアーティストと共演。マドンナの娘が YouTube でふたりを " 発見 " したことがきっかけで、バックダンサーに。2016年、リオパラリンピックの閉会式に映像出演をしている。

立体物を作る労力は時代が進化しても変わらない。

六本木アートナイトで作品を制作してみて、実際に触れられるものを作ることの労力は、いつになっても変わらないことを痛感しました。これほどデジタル化が進んでいるんだけれど、限られた予算内で何をどう作るかっていうことに囚われまくったので、物体を作るのってお金も時間も労力もかかるし、どうしても削れないところがいまだにあるんですよね。しかも私は何度も言うけど写真家だから(笑)、そもそも立体物を作るノウハウがないんです。彫刻家や造形家と違ってゼロからのスタートで経験値がないぶん、どんな作品ができあがるのか自分自身が一番ハラハラしました。

今年の六本木アートナイトは「東南アジア」がテーマのひとつになっていますが、個人的にも最近ではアジアの活動を重視しているので、とても入りやすかったです。今のところ中華圏での活動がメインだけど、「日本の蜷川実花」が「アジアの蜷川実花」になったらおもしろいんじゃないかなと思ったのが、10年くらい前。最初に台湾に種を撒いて、去年ようやく台北で個展を開催したのですが、連日 2、3 時間の行列ができるくらいちょっとした社会現象になって、2カ月弱の会期中に 13 万人も来場してくれたんです。

その展覧会はたとえばチームラボみたいに、見る側もインタラクティブに何かできるわけではなく、言ってみれば一方的に展示しているものだったけど、私の写真を写真に撮ってSNSで発信したり、私の写真と一緒に写真を撮ったりして、それぞれに楽しみ方を見つけてくれていたようでした。



台北『蜷川実花展』

台湾の『台北當代藝術館 (MOCA Taipei)』にて、2016年3月19日～5月8日に開催された個展。これまで行ってきた個展の展示数は多くて約400点ほどだったのに対し、同展では700点を展示。写真以外にも過去の映像作品やグッズコーナーを設けたり、手がけた仕事の年表が展示されたりなど集大成といえる内容で話題を呼び、同館の動員記録を大きく更新した。

間口の広さと奥の深さが比例するような作品を。

映画を撮っていることも大きいと思うけど、私はほかのアーティストよりも、圧倒的に大衆と向き合っているというか、そういう市場にいることが多いと自覚しています。アートに興味のある人って、知的好奇心の旺盛な方が多いじゃないですか。だけど映画の場合、たとえば『ドラえもん』と『スパイダーマン』と私の映画が同列に存在するから、アートよりもいろんな人に投げかけることができるんです。そういう経験もあって不特定多数の人を相手にすることは得意だと思っているし、本来やりたいことにもすごく近い。

いろんな人が気軽に手に取ることができて、おもしろいと思ってもらえるような門の広さがありつつ、実際に入ってみると意外と奥が深くて、思ってもいないような出口にいてくれたらいいなっていうのは常日頃思っています。

そういう意味で六本木アートナイトは、作品を発表するステージとして申し分ない。場所もいいからアートにそこまで興味のない方もいらっしやるだろうし、たまたま通りかかった人が「これおもしろいね」と反応して、それが何かのきっかけになれば嬉しいですね。誰かの初めてになれるっていうのが好きなんですよね。



蜷川実花 写真家 / 映画監督
MIKA NINAGAWA / Photographer / Film Director

photo_mariko tagashira / text_ikuko hyodo

上海の個展を控えて。

台北の個展がきっかけになって、今年の11月には上海で個展が控えていて、これまでで最大の規模になる予定です。この個展を実現させてくれたのが、上海の20代後半の女の子、といってもCEOなんですけどね。「絶対に裏切らないよね」「うん、裏切らない」みたいな女の子特有のやり取りで、ビジネスマンなんだけどマインドがギャル（笑）。

日本では考えられないけど、中国では若い子たちに決定権があって、バンバン仕事を決めてくるんです。上海に巨大なショッピングモールができたときも、「メインビジュアルを実花に撮ってもらおうと思って」とさりりと言われて、「はい、撮ります」みたいな（笑）。日本だったら決定するまでにもものすごく時間がかかりそうなことでも、彼女たちがOKと言ったら実現してしまうので、おもしろいことができそうな予感が常にあります。



上海『蜷川実花展』

2017年11月11日～2018年1月10日に、中国・上海の『LAFAYETTE ART & DESIGN CENTER』で開催予定。過去最大規模となった昨年の台北での個展をさらに上回る内容に。協賛：キヤノン

熱狂的に物事を進める勢いは、アジアから学ぶべき。

アジアの人たちって、おもしろかったらシンプルに喜んでくれるところがいいんですよね。日本の場合、事前の打ち合わせが多すぎたり、丁寧すぎてなかなか進まなかったりして、一見合理的なようでいて、そうじゃないところがあるから。その点、アジアでは打ち合わせが打ち合わせとして機能していないようなことも多々あるけど、おもしろくなるのであれば予定していた内容から変更してもいいし、むしろそれが喜ばれちゃったりもする。

やっぱりエネルギーの量が、日本とは明らかに違うんですよね。日本のクリエイションは繊細だし、優れている面はまだたくさんあるけれども、いいものだけを作っていればいいっていうのは別の、エネルギー量というベクトルも必要なわけで。熱狂的に物事を進めるような勢いは、アジアからどんどん学ぶべきだと思います。アジアと東京を行き来していると、東京はそのエネルギーが残念ながらちょっと少ないと感じてしまう。「おもしろいことやっちゃおうぜ!」「おー!」みたいな向こう見ずなノリが、もっとあったらいいのになあ。

素直に楽しむことで実感できるアートの本質。

アートの受け手、つまり見る側に関していうと、アジアの人の反応はとてもピュア。わかりやすく明らかな感じとか、インタラクティブなものがすごく好きですね。私の展覧会でも「わあ、すごいー!」って素直に反応してくれるから、作り手としても嬉しいです。アートに触れてウキウキしたり、誰かに話したくなるような感じは、アートが持つ大きな力の側面なんだろうなって、彼らを見ていると考えさせられます。

日本人の楽しみ方は、もう少し斜に構えているというか、作品に対して距離がある気がします。たとえば教科書なんかで見覚えのある名画って、「ふむふむ、いい絵ですね」みたいに真面目に見なければいけないと思っているふしがあるじゃないですか。だけどフラットに見たら、このモデルのことを絶対に好きだったでしょ! って言いたくなるような絵とか、それこそ海洋堂のフィギュアじゃないけど、このラインがたまらないって思いながら描いたでしょ? ってツッコミを入れたくなるようなものが、実はたくさんあったりする。

エモーショナルな部分ってどうしてもはみ出ちゃうものだし、自分がものを作っているからよくわかるけど、これはたまらん！と思って作っているところこそ、人間味があっておもしろいんですね。日本人は生真面目だから、そういう楽しみ方をしてはいけないうって思いがちだけど、アートはもっとワーカー言いながら、自由に楽しんでもいいと思うんです。



photo_mariko tagashira / text_ikuko hyodo

展望台と美術館をセットにしたのは画期的な発明。

六本木には小学生のときに父が連れてきてくれて、「ここがディスコだよ」などと教えてもらいながら散策をした思い出があります。小さい頃は特に、自分には関係のない夜の街というイメージが強かったし、大人になってからもわざわざ行く理由がそれほどなかったけど、六本木ヒルズができて変わりました。

六本木がアートの街になるなんて当時は想像できなかったし、六本木ヒルズの展望台と美術館がくっついているって、天才的な発想ですよね。だって展望台に行ったら、ほぼ強制的に美術館にも行くことになるじゃないですか（笑）。

アートって自分とは関係ないと思っている方もたくさんいるだろうけど、実際に体験することによっておもしろいと思ってくださる方もきっといるはずなので、これくらい " 流れで行かされる感 " があつたほうがいい気がする。アート界における発明だと思います。



六本木ヒルズ展望台 東京シティビュー

六本木ヒルズ森タワー 52 階にある、海拔 250 メートルの屋内展望回廊と、海拔 270 メートルのオープンエアの屋上「スカイデッキ」を有する展望施設。展望台のチケットで 53 階の森美術館にも入館することができる（展覧会によっては入館不可）。また屋内展望回廊には、ギャラリースペース「スカイギャラリー」を併設している。

人々の欲望とアートが混ざり合う稀有な街。

私の場合、六本木イコール、六本木ヒルズと東京ミッドタウンになっちゃっているところがありますね。美術館ももちろんよく行くし、ごはんも食べに行くし、映画を見るのも六本木が多いかな。あとスタジオがたくさんあって撮影でよく使っているので、六本木に住んだほうがいいんじゃないかっていうくらい、しょっちゅういます。たとえば六本木スタジオで撮影して、事務所に戻って打ち合わせをして、夜は六本木ヒルズで会食があったりすると、1 日 2、3 往復することになるから。最近は本当に、六本木と事務所とアジアの行き来ですね（笑）。

今の六本木のアートのイメージを、もっと推進していきたいですね。だって世界中の都市で、六本木みたいなところがアートの街になっている例ってあまりないと思います。欲望の渦巻く街だった背景がありつつ、アートの街になっている混ざり具合が珍しいし、おもしろいですよね。

ギャラリーなんかもどんどん増えてきてはいるけど、今はまだアート関連の建物が点在している状態で、線にはなっていない。ニューヨークって気がついたら結構な距離を歩いたりするんですけど、それって魅力的なギャラリーやお店が連なっているからなんですよ。六本木はヒルズとミッドタウンの間がアート好きにとってはまだつまらないから、これが点ではなく線になっていけばいいなと思います。

アジアのリーダーになるには、今が踏ん張りどころ。

六本木アートナイトももっと進化して、夜店とかが出たらおもしろいんじゃない？『未来ノマツリ』が今回のテーマだったけど、お祭りの中心にアートがあったら楽しいですね。それか、麻布十番祭りと六本木アートナイトを一緒にやっちゃうとか。六本木のイベントはきちんとすぎているところがあるから、麻布十番祭りみたいな下町感が出るともっとおもしろいはず。距離的にも全然歩けるし、六本木アートナイトと麻布十番祭りに来る人は若干かぶっていそうだから、なかなかいいアイデアなんじゃないかな。

東京はなんだかんだいってもみんな来てくれるし、文化の中心であり、憧れの対象ではあると思うんですけど、今はその求心力が薄れてきて、急速にいろんなところに分散しつつある気がします。たとえば中国の人に、日本の芸能人で誰を知っているか聞くと、90 年代の流行りで止まっちゃっているんですよ。それ以降のことはあまり知らないし、興味もない。

なかには日本の洋服だったり、アートをすごく好きな人もいたりするけれど、もう一度以前のような求心力を東京が取り戻して、文化面でアジアのリーダーになれるよう戦略的に動いていかないと。もっと危機感を抱かないと、あっという間にいろんな都市に追い抜かれてしまうし、興味がますますほかのところへ向いてしまうんじゃないかな。今が踏ん張りどころですよ。



『さくらん』

蜷川さんが初監督を務めた 2007 年公開の映画。安野モヨコの漫画が原作で、江戸吉原の遊郭で育った少女が花魁になるまでの波乱万丈の物語。花や金魚など蜷川さんおなじみのモチーフを効果的に用いて、アバンギャルドな遊郭を作り上げた。

『さくらん』

DVD&Blu-ray 好評発売中

価 格：DVD 2,381 円 (税 抜 き) / Blu-ray 3,800 円 (税 抜 き)

発売元：アスミック・エース、講談社

販売元：KADOKAWA

(C) 2007 蜷川組『さくらん』フィルム・コミッティ

(C) 安野モヨコ / 講談社

おもしろいことと面倒くさいことは、かぶっている。

オリンピック組織委員会理事をやらせてもらってよかったと思うのは、普段は会わないような方たちと会うきっかけができたこと。アーティスト同士の横のつながりも生まれたし、政治家の方と会ったりするのですが、オリンピックに関わらず、何か新しいことをやろうとするときって、能動的に人と会うじゃないですか。普段自分が動いているテリトリーの外に出て、いろんな人と会うことはとても刺激的だし、そのこと自体が財産になるのだと実感しました。

面倒くさがっていると何もできないけど、おもしろいことと面倒くさいことって、結構かぶっていたりしますよね。面倒だと思わずに怖がらないで動かないと、新しいことやおもしろいことには出会えないし、自分のテリトリー内で動いているだけだと、よっぽどのがない限り、予測範囲内のことしか起こらないでしょ。自分のテリトリーを一步出る勇氣、といっても小さな勇氣だけど、重い腰を上げるきっかけとしてオリンピックとうまく付き合ったらいいんじゃないかなって思うんですよね。



『ヘルタースケルター』

マンガ大賞を受賞した、岡崎京子の漫画を映画化。全身整形を施し、究極の美貌とスタイルを持つトップモデルが、手術の後遺症と頂点から転落する恐怖に追い詰められる様を描く。

『ヘルタースケルター』

DVD&Blu-ray 好評発売中

価格：DVD 1,500 円（税抜き） / Blu-ray 2,000 円（税抜き）

発売・販売元：ハピネット

(C)2012 映画『ヘルタースケルター』製作委員会

(C) 岡崎京子 / 祥伝社

取材を終えて

終始フレンドリーだった蜷川さん。ガーリーな感性を持ち続けたまま、世の中の流れを冷静に見つめるバランス感覚が素晴らしく、若い世代を次々と取り込んでいる理由がよくわかりました。アジアが魅力的だからこそ、東京ももっと元気にならなきゃ！という、東京を愛する蜷川さんの思いが伝わってくるインタビューでした。(text_ikuko hyodo)